

IV-38

情報化時代における児童の地区環境の創出について
—盛岡市松園地区を事例として—

岩手大学 学生員 ○中沢 良
 岩手大学 会員 安藤 昭
 岩手大学 会員 赤谷 隆一
 岩手大学 会員 南 正昭

1. はじめに

近年における情報化社会の進展は人間に大きな恩恵を与えている。ここ二十年において情報は非常に価値のあるものになった。特にインターネットは、従来の出版・通信・放送といった情報発信機能を同時に併せ持つという特徴を持っており、情報伝達・発信の仕組みを根本的に変化させた。しかし、それと同時にインターネットの「影の部分」が深刻な社会問題を生み出している。何らかの形で情報が活用されて起きた事件や犯罪があとを絶たない。このようなことが頻繁におきている現代において、特に人格形成期にある児童（6～12歳）にとって、情報が与える影響は計り知れない。将来を担う子供にどのような教育・環境を与えてやればよいのかということについて考えることは急務である。そこで、本研究は、盛岡市松園において、工学的な視点から、児童が日常暮らしている地区環境の中での情報の関わりについての現況を把握することを目的としている。

2. 研究の概要

(1) 盛岡市松園地区の概要

盛岡市松園地区は、盛岡市中心街から北東に約5.5kmにある、周囲を山に囲まれた人口約2万人を収容する岩手県有数の住宅地域である。地域内には3つの小学校、2つの中学校、養護学校、保育園や学童保育などの教育施設、また各種病院、県立博物館などの公共施設、四十四田ダム、小鹿牧場などの自然環境にも恵まれている地域である。地域内にある小学校は現在、松園小学校は開校30年目、東松園小学校は開校25年目であり、両地区共に同様に少子高齢化が進んでいる。北松園小学校は開校10年目であり、地区内には比較的若い世代が多く児童数も多い。

(2) 研究の概要

本研究では、各々の小学校の学区をひとつの地区とし、各学校の児童を取り巻く環境を総合的にとらえるために、安藤らによって見出された、「感覚統合理論による都市デザイン」の理論に着目し、現在の児童を取り巻く地区環境を、4つの視点、つまり主観・客観・問客観・問主観¹⁾²⁾から調査を行うための項目を決定し、その現況の分析を試みる。

3. 調査の概要

調査内容を表1に示す。調査の項目は、自然・生物の認知度、遊び場、情報機器の活用程度、地区活動・塾・スポーツ少年団の活動状況、人間関係状況、プライバシーの状況、松園の総合的評価である。対象は、松園内にある北松園小学校・東松園小学校・松園小学校の5、6年生の児童約500人である。調査は、直接各小学校を訪問し、学級ごとにホームルームの時間45分間で集合調査法によって行った。調査の概要を表2に示す。

表1. アンケート質問項目

質問項目	質問内容
客観	1. 地区の自然について 地区内の自然、生物の認知度、自然・公園での遊び、
	2. 外での遊び場について 学校・近所での遊び
問客観	3. 携帯電話について 携帯電話の所持、利用状況
	4. インターネットについて インターネットの利用状況
問主観	5. テレビについて 視聴時間、好きな番組、好き嫌い
	6. テレビゲームについて 遊ぶ時間、好きなゲーム、好き嫌い
	7. マンガについて 読む時間、好きなマンガ本、好き嫌い
	8. 本(マンガ以外)について 読む時間、好きな本、好き嫌い
	9. 地区行事について 参加状況、内容、好き嫌い
	10. スポーツ団体について 所属状況、好き嫌い
	11. 学習塾・習い事について 所属状況、好き嫌い
	12. 友達関係について 遊ぶ相手、遊ぶ場所、遊ぶ内容、学校での流行りごと
	13. 近所関係について 近所づきあいの程度
	14. プライバシーについて 休日・平日の過ごし方、趣味など

表2 調査概要

	対象	調査実施日	調査票配布数	調査票回収数	回収率	調査方法
北松園小学校	5, 6年生	1月25日	281	272	97%	集合調査法
東松園小学校	5, 6年生	1月28日	108	102	94%	集合調査法
松園小学校	5, 7年生	1月21日～2月4日	130	126	96%	集合調査法

4. 解析結果及び考察

(1) 集計結果

表1で示した調査項目のうち質問3～8についての集計結果は表3に示す。集計から得られたことを以下に箇条書きとする（これ以降、北松園小学校、東松園小学校、松園小学校のことをそれぞれ北小、東小、松小で表すことにする）。

- ・携帯電話の所持は1割程度である。
- ・携帯電話よりもインターネットの関心が高く、または9割弱の児童がこれを日常的に利用している。
- ・テレビへの関心が非常に高い。
- ・北小は自宅にパソコンを備えているところが多く、児童利用できる環境下にある。

携帯電話については、単独で所持することは難しいため持たない児童が多い。それよりも学校や自宅で気軽に使えるインターネットをよく利用している。3校とも児

表3 アンケート質問項目

質問項目		北松園小学校 人数(272)	東松園小学校 人数(102)	松園小学校 人数(126)
自分の携帯電話を持っていますか。	1.持っている	24	10	19
	2.持っていない	246	91	107
	3.無回答	2	1	4
携帯電話の使い方は	1.電話として	17	7	8
	2.メールとして	11	4	6
	3.メモ帳として	2	1	3
	4.住所・電話番号録として	7	1	4
	5.インターネット用として	3	0	0
	6.あらゆる機能を使う	7	2	6
	7.その他	4	2	4
	8.無回答	248	91	111
あなたはインターネットをしますか。	1.よくする	75	24	20
	2.たまにする	153	55	67
	3.しない	33	12	17
	4.無回答	11	11	22
何をつかってインターネットに接続しますか。	1.自分の携帯電話	3	1	2
	2.家の人の携帯電話	19	4	6
	3.友達等の携帯電話	0	0	0
	4.自宅のパソコン	189	56	49
	5.学校のパソコン	97	44	49
	6.インターネットカフェ	1	0	0
	7.友達等の家のパソコン	27	2	5
	8.テレビゲーム	3	4	7
	9.その他	6	4	3
	10.無回答	44	20	38
テレビの1日の平均視聴時間		234分	190分	221分
テレビゲームの1日の平均遊び時間		55分	64分	82分
マンガの1日の平均読書時間		39分	50分	57分
本(マンガ以外)の1日の平均読書時間		20分	21分	44分

童に学校内のパソコンを開放して積極的に指導していることが関心につながったと考えられる。

(2) 数量化Ⅱ類による地区環境の総合評価

地区環境について、地区の総合評価をするために数量化Ⅱ類を用いて要因分析を行い、地区環境に影響を与えている項目を探ることにした。目的変数を松園の地区環境とし、カテゴリーは「非常に不満」「不満」「どちらでもない」「満足」「非常に満足」あるいは、「非常に好き」「好き」「どちらでもない」「嫌い」「非常に嫌い」の各々5段階である。因子分析により、説明変数を12から7つに絞り込んだ。数量化Ⅱ類による解析結果を表4に示す。北小のレンジは、1位が「①地区の自然について」、2位が「⑥近所関係について」、3位が「⑦プライバシーについて」となり、相関比は0.7214と精度のよいものとなった。

東小のレンジは、1位が「⑥近所関係について」、2位が「携帯電話・インターネットについて」で3位は「④マンガ・本について」となり、相関比は0.5976となった。

松小のレンジは1位が「近所関係について」、2位が「①地区の自然について」、3位が「プライバシーについて」となり、相関比は0.8181となり、これも高い精度で

持っていることがわかる。

これら上位レンジ1～3位を比べると3つの学校共に「⑥近所関係について」が大きく影響していることがわかる。松小においては⑥の偏相関は4.1962と非常に高くでている。松小の地区は造成から30年以上たち、他の2つの地区よりも地区コミュニティの強さが現れていると考えられる。「①地区の自然について」が北小と松小で上位であった。松園は主に住宅地ではあるが、元々は山地を開発して造成された地域で、野生のカモシカやリスも出ることがあるという。地区内にも公園やグリーンプロットなど遊び空間・自然空間が点在しており、児童が遊ぶ場所として認知・利用されていると考えられる。本研究で注目していた、情報項目については東小を除くと要因にはならないといことがわかる。全体的な精度については、北小と松小は目的変数に影響する説明変数が類似しており、且つ相関比も高いことから信頼のある結果となったことがいえる。しかし、東小は相関比が低いいため、信頼のある結果になったとは言えない。

5. まとめ

本研究では、現代の情報化社会の中で生活する児童を取り巻く地区環境の現状を把握し、それに影響を与える要因について考察した。その結果、「情報」は児童を取り巻く環境の一部として取り込まれていることが示された。しかしそれが、児童にとっての生活の満足度に大きく影響せず、近所関係や地区の自然が、影響することが示された。

6. 結び

- ・地区コミュニティや自然環境・生物的環境について、児童の目線に立った問題点を改善していくことが、地区環境を創造することにつながる。
- ・本調査の範囲では児童の携帯電話やインターネットの使用は、必ずしも地区の満足度に影響しない。

参考文献

- 1) 安藤昭、赤谷隆一：感覚統合理論による都市景観設計の体系化、土木学会論文集、No. 635/IV-48、pp. 63-75、2000
- 2) Ken Wilber：統合心理学への道／松永太郎翻訳、春秋社、2004

表4 松園の地区環境評価の要因

説明変数		北松園小学校(被験者数190人)		東松園小学校(被験者数81人)		松園小学校(被験者数87人)	
		レンジ	偏相関	レンジ	偏相関	レンジ	偏相関
客観	①地区の自然度について(満足度)	1.7744	1位	1.2934	5位	1.3553	2位
間客観	②携帯電話・インターネットについて(満足度)	0.4953	6位	1.4301	2位	0.8127	7位
間主観	③テレビ・テレビゲームについて	0.3279	7位	1.3555	4位	0.9528	5位
	④マンガ・本について(好き嫌い)	0.9584	4位	1.3683	3位	0.8566	6位
	⑤地区行事・スポ少・塾について(満足度)	0.8725	5位	0.6384	6位	1.1773	4位
	⑥近所関係について(満足度)	1.4029	2位	1.5893	1位	4.1962	1位
主観	⑦プライバシーについて(満足度)	1.3463	3位	0.5908	7位	1.2333	3位
		相関比	0.7214	相関比	0.5978	相関比	0.8181